

《研究成果の概要》

◆台湾の歴史

台湾の歴史は短い。長い原住民(台湾では「先住民」の代わりにこの用語を使っている)の時代に新たな文明を持ち込んだのは、1624年に台南に植民地を建設し台湾全島の支配と開発を初めて目論んだオランダであった。オランダはスペイン勢力を台湾から追い出し台湾への支配体制を確立した。

鄭成功は、抗清復明運動のなかでオランダとの戦いを制し(1661年)台湾全島を支配することによって台湾初の漢人政権を打ち立てた。鄭氏政権は、1683年に清国に屈服し22年ばかりの短い政権であったが台湾に根を下ろした漢人政権として大陸中国や台湾の両方から高く評価されている。

1683年から19世紀に至るまでの清国の台湾支配は、200年の長きにわたってはいるが本格的な支配や開発は及んでおらず、1874年の日本の台湾出兵で目覚めることになった。

日清戦争による日本の台湾統治は敗戦までの50年間に及ぶ。決して長い期間ではなかったが短い台湾の歴史において画期的な文明をもたらした期間であり、今日の台湾と台湾人の歴史観に少なからぬ影響を及ぼしていると考えられる。

戦後、国民党の遷台によって大勢の大陸の「外省人」が台湾に入り、「本省人」との対立・葛藤のなかで微妙なバランスをとりながら台湾の現代化は進んだ。1987年によりやく戒厳令が解除され、2000年には民主進歩党の陳水扁が総統に当選し、台湾の民主化は軌道に乗り今日に至っている。しかしながら民進党は台湾独立の志向を強めた結果兩岸問題を触発することとなり、焦眉の問題となっている。

このように台湾の歴史には、原住民文化、オランダ(スペイン)文化、本省人の文化、日本文化、外省人の文化などが複雑に混在しており、一筋縄ではいかない多様性があることを、まず認識すべきであると考ええる。

◆東アジア三国(日・韓・中)の近代と「不平等条約」について

今まで日本と朝鮮の「開国」と近代について研究を進めてきた。ここに中国の「開国」と近代を調べることによって東アジアの「開国」と近代の意義を再措定することができると考えた。

台湾最大の書店である「三民書局」の歴史コーナーの本棚は、古代コーナーの次が近代であった。このような二分法的な時代区分は、大陸や台湾の様々の研究書や現在使われている教科書のなかでも確認することができた。その近代の始まりをアヘン戦争に求めることには異論がなかったように思える。このアヘン戦争について多くの先行研究が中国歴史始まって以来初めての大変動と捉えているのは、枚挙にいとまがなかった。「蓋し数千年閉館自守の国家を以て其の伝統とし」、「今日の天下は既に三代の天下ではない」、「3000余年の大変局で未だかつてない世変」、「西洋人が中国に入ったのは天地の一大変」、「東洋世界は依然として中古に停滞」などなど。

ところがこのような中国歴史始まって以来の大変動と捉えているわりにはアヘン戦争と中国近代に対する研究や評価・紹介にはあまり関心が高いようには見えなかった。歴史始まって以来の画期的な大変動という捉え方とその研究や評価などに関する貧困状態はあまりにもアンバランスであったと感じた。その背景には大陸中国や台湾の現実と現代史がかかわっているようである。

中国共産党100周年記念祝賀会の習近平主席の講和が象徴的であるといえよう。大陸中国の歴史観は、アヘン戦争以来の苦難の時代を半植民地・半封建社会と捉えることによって、その解放者としての共産党の役割を際立たせようとするあまり、ありのままの自由な歴史研究は保証されていないようである。また講和のなかでも繰り返されているように、中国共産党はマルクス・レーニン主義に寄って立つものであり、マルクス・レーニンの歴史発展論に沿った歴史観が中国の公定歴史観になっているようである。教育に関しても、愛国主義教育、社会主義教育、国情教育、革命伝統教育と民族団結を明確に標榜しており、自由な歴史研究は保証されていない。このような状況は容易に変わるものではなさそうだ。

一方台湾においては、戦前の国民党の歴史観から大きく外れてはいないようである。洋務運動・変法運動・孫文と辛亥革命につづく蒋介石の抗日闘争のなかでの歴史観が無批判的に引き継がれているように見える。蒋介石に対しての評価はいずれ変わっていくものと思われるし、その変化は必然的に近代の中国の歴史を捉え直すことにつながるであろう。しかし台湾の現状は上述したように兩岸問題とアイデンティティ問題で手いっぱいになっているようにみえる。

このような状況下で「東アジア三国の近代」を研究することも容易ではなさそうだ。まず手始めにできることが東アジア三国の歴史教科書について考察することである。そこで中国大陆と台湾の高校の歴史教科書を入手した。台湾では高校歴史教科書のなかでも最も採択率の高い龍騰出版社の教科書3巻、大陸では人民教育出版社の数種類の歴史教科書を入手し、今後これを比較検討し東アジア三国の近代の捉え方とその歴史的意義について考えていきたい。